
宇宙から来た黒いヤツ

コニ・タン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宇宙から来た黒いヤツ

【Zコード】

Z5862K

【作者名】

コニー・タン

【あらすじ】

その日、宇宙より邪悪な意思が地球へと向かって降下していた。その名は「侵略兵器」、地球人を恐怖の底に叩き落す宇宙人の殘虐なる作戦だ！ だがその作戦にはたつた一つ、たつた一つの穴があつた。『『『しんりやく』つてなんでしょう？』。細かい事を考え出したら頭が痛くなるほど設定が適當なSF「メディ！バトルもあるよ！』

(前書き)

足掛け一年ぐらいです、ええ。放置してたものを書き上げてなんとか形にしました。
面白いかどうか自分でも分からぬ実験作みたいなもんですが、お気軽にどうぞ。

【地球侵略について】

さて、今回我々が目を付けたのは地球といつ星である。位置については、添付したデータファイルの中身を参考にして欲しい。

適度な自然と開発された土地、豊富な水と、原住民さえ駆逐すればすぐにでも住めそうなほどの環境だ。さらには原住民の戦力もそれほどではなく、侵略は容易いと思われる。

そこで今回は人型強襲戦略有機兵器を一機投入し、それで様子を見るつもりだ。対策を講じるもよし、そこで滅びるもよし、どちらにせよ原住民が辿る道は一つ。

それでは諸君の健闘を祈る。とはいっても、兵器の護送だけで終わるだろうが。

【2がつ15にち】

長旅でした。

母艦から射出されたのが、3600秒を1単位とする時間で1000単位以上つまり、これから向かう星の単位で行けば41日以上の時間を星空の中で過ごした事になります。

しかし地球の生物も馬鹿ですね。宇宙に向けて電波飛ばしたりしたら、ここに居るって言つてるようなもんじやないですか。まったく、危険性とかそんな事を考慮しない、蛮勇な精神を持つ生物なのでしょうか。おかげで、私も受信範囲を広げ、地球の知識を吸収する事まで出来ました。褒めて欲しいです。

しかしこの一ヶ月以上の旅、地球生物からすればとても速い方み

たいなんですよ。」の太陽系の外から地球の重力に届くまで、こんなにかかりたのに。

まあ、私自身に推進力は無いから仕方ないんですけどね。反発力らしいです。私には良く分かりませんが、母星の科学力は宇宙一です。

おつと、大気圏が成層圏かは分かりませんが、あつたかくなつてきましたね。私を作つてくれた研究者がふと「冬の帰宅つてさ、なんか暖かくてほつとするよな」などと言つていましたが、「しんりやく」兵器の私にもその気持ちが分かる気がします。

わ、私は「しんりやく」しに地球に来たのです。頑張らないと、「ミミコにぽいされてしまうのです。怖いです。

さあ、頑張りましょう。ぽいされないために。「しんりやく」をするのです。

といふで、「しんりやく」つてなんでしょうか？

困りました。「しんりやく」が分かりません。脳内辞書にも平仮名しかありません。「深縁」なら分かるのですが。

さあ困りました。ぽいは怖いです。研究者の人が怖いと言つていたから、多分怖いのです。

とりあえず、着地しましょう。地上はもうすぐです。正確にはあと160m。

3・2・1……はい、着地完了。しかし何と脆い地面でしょう、足首から先が埋まつてしましました。

はてさて、困りました。確かに私は史上最強の「しんりやく」兵器。抜こうと思えば一発で足を抜き、そのまま数mにも及ぶ地割れを発生させる事しかできません。そう、それしか出来ないです。

私の田の前には、一匹の生物がいました。困ったものです、足を抜けばこの原住生物が塵すら残らない事態となりかねません。「しんりやく」に必要であるかもしれないのですから、簡単に消してしまつのも黙田でしょ。

「でつけー

私の真下にいる生物のうち一匹、肌色の皮膚に黒い頭頂部、白い布と青い布地を纏つた生物が言いました。

「こわいよつ、ケンちゃん

私の真下にいる生物のもう一匹、やせせぞりつつも田の肌色、黒い頭頂部ですが横に一本アンテナを広げています。やひひひひひひは、淡い青の布一枚でした。

もしかして、何かを纏つのが普通なのでしょうか。全裸の私としては恥ずかしい限りです。

「だいじょうぶだつて、ココキ。ちよつといこつ、話してみようぜ

「でもでも、ケンちゃん、おひきこよお。黒いよお。布そうだよお

初めて触れる生の原住生物の声ですが、私はうるたえません。今こそ、ラジオ放送を傍受する事で身に付けた華麗なる地球語を披露するべき所です。

もちろん、彼らの言葉もおぼろげながら意味が掴めました。こちらに對して、友好を求めてきていくようです。さあ、さうと決まれば話しかけましょ。

「ゲ

困りました。

どうやら私の声帯は、こととん発音には向かないようです。「ゲ」つて。

「け、ケンちゃん！ な、なんか吠えたあ！」

失礼な。私は「こにゃにゃちわ」と挨拶したかつただけですのに。まだキチンと把握していないのでニコアンスは変かもしませんが、誠心誠意友好を図ろうとしたいのです。

「大丈夫だよ、ホラ、コイツ。暴れてねえじやん。連れて帰るつぜ、親父こいつの好きだし」

「だ、だめだよ。だつて、イヌもネコも飼っちゃダメって、言われてるんでしょ？」

「甘いな、コユキ。コイツア犬猫とはわけが違う。人間、いやそれ以上の」

なんだかゴーヨ、ゴーヨ喋っています。私はまだ完璧に聞き取れるわけでは無いので、それだけ早く喋られるとついていけません。あうう。

「コイツは、絶対宇宙人だ！ 悪の怪獣を倒す、ヒーローだ！」

ヒーロー。

あれ。あれれ。なんだかとつてもカツコいい響きです。頭に響き、交感神経を超刺激します。

「ゲ」

「やつぱつとうなんだな、お前ー！」

思わず漏れ出た感動の一聲と共に、アンテナ付いてない方の生物が羨望の眼差しを向けてきます。

「よつしゃー、爺ちゃん呼んで来いココキー！ 握るぞ、こいつの足！ そんで、家に連れて帰るんだー！」

「え、えーっと……う、うん！ 分かった！」

なんだか「ひーるー」という格好いい響きとともに、友好関係も築けたようです。
めでたしめでたし。

＊＊＊

予定では、今頃もう侵略兵器は地球に辿り着いているはずだ。
有機兵器である奴は、全てを破壊し、食らう事で成長する。生物が混じつてるので性格に個体差が出るのが難点だが、どれだけ温和であろうといずれ食欲に負け、地球上の手近にあるモノを食い始めるだろ？。

その後はいつも通り、奴ごと地形の一部を遠距離から破壊し、私達の理想郷を築くだけ。

さて、何日で地球は墮ちるかな？

＊＊＊

【2がつ16にち】

相変わらず「しんりやく」を思い出せません。「新宿」なら昨日教えてもらつたのですが。

私は昨日、ケンという個体名の生物、ココキといつ同種の別個体によつて掘り出されました。あと、ジイチヤンといつ個体も居ました。

そしてその後、彼らの巣についていました。どうやら自然物を切り貼りして、積み重ねて作つてゐるようですね。加トと言えば表面処理ぐらいのものです、弱々しい。

ちなみに私は巣の入り口よりも少々体が大きかつたので、その前で一晩過ごしました。寒くなんかないです、ぐすん。

「おひ、ヒーロー！ 起きてるか！」

個体ケンが巣の入り口から飛び出し、私に話しかけてきます。どうやら起床の有無を尋ねてゐるようですが、残念ながら私にそういう概念はありません。脳が複数あるので、使わない時には一つずつ休ませておけるのです。すごいぞ私、さすが史上最高の「しんりやく」兵器。

「ゲ」

「元気そつだな。ココキは隣だからまだだけど、また後で来るからよー。つと、じいちゃん！」

ケンは忙しそうです。私の方をむいて喋つたかと思えば、私にはどうも見分けがつかない隣の巣へと視線を動かし、さらには私通り過ぎてこきます。

「おっ！ どなつちよるかケン坊、ひーるさんの様子は」

ケンと話しているのはジイチャンです。彼はケンや「ココキ」よりも大きくて、いつも何かを手に持っているのが特徴です。昨日は私を掘り起こす道具でした、今日はでこぼこ地面を掘り返す道具です。同じ用途なのにどうして使い分けるのでしょうか？

「ヒーローは元気だぜ！ という訳で爺ちゃん、野菜くれ！ ヒーロー、昨日から何も食っていないんだ！」

「おうおう、すふれいしてここに来るぐらいださかい、おもしやいだよなあ。野菜だけじゃなくとも、飯食わせてやんな」

どうやら会話は一段落着いたようですが、相変わらず忙しい動きで、ケンはジイチャンを追い越していました。

それから座して待つこと数分、ケンは一人に増えて いえ、違います。アンテナが消えて頭部から黒いものをぶら下げたココキでした。まだ同じ大きさの同個体を見分けることには慣れません。こんな事ではぽいされちゃいます。

さて、一人は両手一杯に赤やら緑やらの何かを持っています。なんだか、キレイですね。

「ヒーロー！ これ、爺ちゃんの作った野菜！ 一杯食べよう！」

「え、ええと……た、食べ物だよ？」

聞こえました。聞き取れました。ええ聞きましたとも。

食べ物。

実は、昨日からお腹が減っているのです。ケンの巣をかじつちよる

いやうになりましたが、ぐつと我慢したのです。
しかし食べ物となるとつまり食べていいのです。遠慮なく頂きましょい。

お口、展開。

「ひやあ！？ なんか、がしゃんって音が……怖あつ！？」

「あつざー！ ヒーロー、カマキリみてえだー！」

なんだか、口を開けただけなのにすぐ脹やかな反応が返つてきました。残念ながら、好意的なのがどつかは判断がつきませんでしたが。

両膝を地面につけたまま、ほほしゃがんだ状態で手を開きまくる。ケンの身長は私の二分の一ぐらしきないので、いつしないこと受け取れません。

「よつし、まづはーんじんだ、爺ちゃんの野菜は美味しいぞー。」

手渡されたのは赤い物体、どつぢり「にんじん」とこいつしいです。見た目にも鮮やかで、いかにも食欲をそそります。

口に放り込み、ガチンとアゴを閉じました。あとは口の中で咀嚼器が作動し、味覚に情報を伝えてくれるはずです。

結果、出ました。美味しいです。この硬さが私のアゴによく馴染み、ほのかな甘みは味覚を楽しませてくれます。すげえです「にんじん」。「しんりやく」という田的を忘れそつです。

「にんじん」、おこし……。

「ゲゲ」

「おお、美味しいか、ヒーロー。」

おかしい。

地球の表面を観察させている別働隊からは「異常ナシ」の報告ばかりだ。一体全体、兵器は何をやっている。

食欲がまだ発動していないのか？　いや、今までの最長を何日かオーバーしている。あり得ない。

まさか、撃退されたのか？　いや、それこそあり得ない。地球人の兵器で奴を殺そうとするなら、「異常ナシ」で済ませられる事態ではなくなる。

何があつたのか気にはなるが、下手に干渉してこちらの戦力を削られるのも面白い。

しばらぐは傍観としよう。

【2がつ23にち】

『今日から君の名前は、スピルオーバーマンだ!』

「ゲ」

受話器から声があふれ出します。そこまで大きな声を出されると、逆に聞き取りづらくて大変です。

今、私は「けいたいでんわ」で個体オヤジと話しています。どうやら今は遠くに居るようで、この端末を通してしか話せないようです。

『ああ もう一、どうしてこんな時に僕は出張なんだ！　待望の宇宙人！　それも変身ヒーロー風！　くあー、見てえつー』

叫んできます。むりやへりや叫んできます。怖いです。狂氣すら感じます。

「オイロリ 親父！　何勝手にヒーローにな前付けてるんだよー！」

『ふふん、早い者勝ちだぞケン。お前はどうこう前を付けよつとしてたんだ？』

「スーパー・ブラックマンー　どうだ、強そうだひー！」

『風情がない！　単純すぎるー　いいか、スパルオーバーと並の規格外の区域に電波が流れる事を言つてだなあ、つまりこれは文化のスパルオーバーと言つ事で……』

なんだか、端末の向こうのオヤジ相手に脹やかなケンです。

さて、優秀な「しんりやく」兵器である私は今日も元氣です。未だに「しんりやく」は思い出せませんが、「貧弱」は覚えてます。貧弱貧弱ウ。

「にんじん」を初めて食べた日から一週間ほど経ちました。毎日毎日語り口調で脳内メモリに収める必要は無いかもしませんが、何が「しんりやく」の役に立つのかも分からないので、田記としてしたためさせて頂きます。

「よつし、今日からお前の名前はスパルオーバーマンな！」

『ひややりオヤジとケンの話しあいには終わつたみたいですね。ひー

「ひー」と言ひ響きも好きだつたのですが、どうやら改めざるみたいですね。まあこっちも好きですが。

しかしこの一週間ずっと外で居るわけにはいかなかつたとはいえ、ケンの人望には驚きました。彼と一緒に歩いていると、他の原住生物がまったく焦らないのです。試しに一人で歩くと、そりや仰天されましたとも。

そのおかげで、ケンと交友のあるジイチヤンと同じぐらこの大きな個体の巣の一部を借りることが出来ました。広いです、私以外には四輪駆動の車がありました。四輪駆動とは、この惑星の文化レベルが窺い知れます。

「…………」

おつと、黙考している場合では無いようです。ケンが私の事を見上げてきています。どうしてんでしょうつか？

「なあスピル。お前、ヒーローなんだから敵が居るよな？」

「ゲ？」

そうなのですか。「ひーるー」には敵が居るものなのですか。うん……敵？ そうだ、思い出しました。「しんりやく」とは、敵が居て初めて成り立つものなのです。おお、ケンのおかげで私は一つ閃きました。褒めてあげましょう。

「ゲ」

相も変わらず、私の喉は同じ音しか発しません。不便です。口さえ開ければ、ケンに「しんりやく」の意味を聞くことが出来るの。」。

「やつぱ、敵が居るんだよな！」

私の「よ～しよしよし」と発したかった言葉を、ケンは肯定と受け取つたようでした。なにやら、いつも以上に日が輝いています。

「よし、スバル！ 特訓するぞー！ 裏山に行つて、必殺技の練習だー！」

特訓ですか。敵を倒すのに必要なんでしょうか。

しかし私は、今までも十分完成された史上最強の「しんりやく」兵器、特訓などしなくても強いのです。えつへん。

……しかしそれでも、ケンが望むというならばやってみましょう。私はケンに対して、恩義があるのです。受けた恩も返せないとなれば、母星の名が泣きます。

いぐらでも、やつてあげましょ。

「ゲ」

「にんじん」さえ用意してくれるならば。

もう我慢の限界だ。

侵略兵器は何をやつていい？ 奴のスペックで敵があのサイズの惑星ならば、既に大混乱で滅んでしまつていてもおかしくない日数だ。

まさか、原住民は我々が知る以上の戦力を隠し持つていると？

……あり得ない、とは言い切れない。

仕方ない。一機を失つたというのは痛手だが、ここからでも十分挽回できる。

もう一機、次はもっと高スペックの侵略兵器を投下しよう。
さあ、滅びてもらうぞ地球人。我々の為に。

【3がつ23にち】

「君がスビルか！ くあー、かつけえ！」

田の前に居る、ケンより少し大きい個体が叫びます。ケンよりも体を覆う布の面積も大きめでした。布の面積が位分けにでもなっているのでしょうか？

とりあえず声紋認証してみた結果、この生物は個体オヤジだと判明しました。あの乱れた電波からの的確に割り出した私の超技術を褒め称えるといいのです。

「ゲ

「崇めよ愚民ども！」と言おうとしましたが、やはりこの喉は单调な音しか奏でてくれません。しかし代わりに、オヤジが反応しました。

「おおそつか！ 君も僕に会えて嬉しいか！」

「え別に。

「ゲ

「ははは、照れるなよう。君ももう、家族みたいなものなんだからな！」

別に照れません。あと、私は別に血縁ではありません。
さて、どうしましょ。オヤジも「しんりやく」の役に立つかもし
れない以上、無闇に活動停止させたくありません。しかしそれでも、
このままでは私が色々と色々な事になる危機感があります。さすが
有機兵器である私、兵器でありながら直感すらも得ています。

「おい親父、やめろよ。スピルが困つてるだろ」「

おお、ケンが出てきました。巣の中から現れたケンが、入り口に
立つていた私とオヤジに近づきます。

「出張から帰つて早々、何やつてんだよ。かあちゃんもじいちゃん
も待つてんだから、早く飯食おうぜ」「

「何を言つた健！^{けん} 家族での食事はいつでも出来るが、コイツはい
つか宇宙に帰つてしまふかもしないんだぞ！」

「ハイハイ分かった、でも親父、今日はかあちゃんが頑張つてたぜ。
肉じゃがとマカロニグラタン、あさり汁だつてや」

「僕の大好物フルコースとは卑怯なあ！」

オヤジはいきなり絶叫すると、ケンを抱えて家の中に入つていきました。忙しい生物です。

さて、私は星でも見る」とこしましょ。この惑星に来てからの
日課です。

私の故郷は肉眼で確認しにくいですが、「しんりやく」兵器とも
なれば余裕です。超余裕です。ちよろあまです。
では、目、展開。

そういうえばいつか目を開けたとき、ココキが「のっぺら顔が開いたあ！？」伸びたあ！？」怖あつ！」とか言つてました。失礼な。でもその後ケンが「双眼鏡みたいだな、スピル！」って褒めてくれたので帳消しにしてあげましょう。私は心が広いのです。

それにしても、やはり「しんりやく」のきちんとした意味は思い出せません。「輪郭」なら用法まで説明できるのですが。

しかし今は、そんな事を考えないでおきましょう。空が広いです。暗いです。でも、ちかちかします。

「ゲ

今私は乙女全開です。ちなみに性別なんて存在しないから男でも女でもいいのです。その所、ケン達は不便そうだなあと思うわけですが。

空を見上げると、色々な事がどうでも良くなるように感じます。なんというか、この惑星でさえも滅ぼせるはずの力を持った私が、それでもちつぽけな存在だと思えるんです。

ケンが置いておいてくれた「にんじん」、おいしいです。カリカリかじりながら見る夜空は綺麗です。

どうやら、この世界はとても素敵です。ケンは小さいけれど頼もしく、ココキは最近よく笑ってくれるようになりました。ジイチャンはいつも「にんじん」をくれるし、カアチヤンは彼らとサイズの違う私に気を回してくれます。オヤジだつて鬱陶しい存在ではありますが、名前をくれたし、何より私の事をよく思つてくれているのは間違いないです。

「げ……ゲ」

この口は意味ある言葉を発せないけれど、それでも彼らとは仲良くなれた気がします。

「しんりやく」、忘れてしまいそうです。いえ忘れているのですが、目標として持ち続けることが出来なくなりそうです。

早く、早く思い出して「しんりやく」しなければ。

そろそろ後から送った侵略平気が地球につく頃だ。

奴ら侵略兵器は複合脳を効率的に使うために、ほぼ体の隅々までに電気信号 様々な電波を発している。強く弱く、混線しないように体のあらゆる所に電波遮断の体機能があるが、しかしそれでも同属に見つかる程度の微弱な電波は漏れるはずだ。

もし地球人がそれを解析し先に送った奴を利用しているかも知れないと思うと憂鬱だが、しかしそれでもやらねばならない。手柄も無しに本星に帰るわけには行かない。

いざとなれば 正面からやり合つてでも滅ぼしてやる。地球人め。

訳がわかりません。理解できません。私ほど高スペックな脳でも解析不能です、どうしましよう。

しんりやく兵器が、増えました。

「スピル！」

ケンの声が聞こえます。ああ、なんなんでしょうこれは。「しんりやく」とは何なのでしょう、「前略」なら手紙の前につける言葉なのですが。

いや、それより 何故、私がいるのにもう一體送り込まれてくるのでしょうか。「じんりりやく」とは私一体で十分なはずです、そのための「じんりりやく」兵器なのですから。

過去を情報参照してもまつたく答えにたどり着けません。いつも通りケンの家の前で「しょうりのぼーず」の練習をしていたらいきなり落ちてきました。そして、私と違い迷わず足を引き抜きました、最も向こうは足が細いので被害は小さいですが。

どうやら向こうも発音は得意でないようです。足がハ本だからでしょうか、細長いからでしょうか。

ああ、しかしどうなつてしまつたのでしょうか。私の存在意義は消えてしまつたのでしょうか。

御同属は私の元に走り寄ってきます。ですかと「せら友好的では無いようですが、私は最近「くつさをよむ」を覚えました。

「スビル！ 敵だッ！」

私の腕が動きます。足が御同属の前まで私の体を運び、そして体全体で受け止めます。

あれ。あれれ。何だか「敵」と聞くと自動的に走り出してしまいましたよ？ 何でしき、ケンの刷り込みなのか本能なのか、まったく判断がつきません。今日の私はどうしたのでしょうか、ぽんじつです。ぽいされちゃいます。

ああ でも、「しなりやく」兵器として必要なくなつた可能性のある私は、ぽんじつじやなくともぽいかもしません。それは何故か、とても嫌です。

「どうした健!?

「ケンちゃんあん！ 大丈夫！？」

真後ろ、あることは真下と言える位置からオヤジとココキの声が聞こえました。聞き慣れたからといって、私はただ今全力で現在置かれた情報を把握するのに忙しいので訳せません。ただ、酷く焦っている様子でした。

「ココキ！ 隠れてるよ、お前！ 僕とスピルに任せろ！」

「危ないよおケンちゃん！ 一緒に逃げよおよう！」

ケンはココキに引つ張られます。そしてオヤジはその一人を守るように背を抱き走っていきました。感覚器官で風を読んだだけなので曖昧ですが、大体そんなところです。

後ろにはケンとココキとオヤジが居ます、たったそれだけです。前に居るのは御同類、邪魔しちゃ駄目ですね、例えどんな理由があつても目的は「しんりやく」なのでしょうから。さて、となると私はここから離れなければいけません。

だと呟つのに どうしてでしょう。

「グガアアアアア！」
「ギガアアアアア！」

声が同時に二つ、外側と内側から。やっぱり全力で声を出すと力がみなぎります。……ええ、邪魔しちゃいました。それもこれもケンのせいです、敵と言わされたから体が反応しちゃったのです、そうに決まっています。

とは言え、いささかパワー負けのようです。腕の外部骨格が割れそうだとこう事を、電波神経が伝達してくれます。まったく、同じ

「しんりゅく」兵器だとうのにパワー負けすると黙つのはどういふことでしょう、エレガントさでは私の方が上ですが。

「さり、拳が粉碎 それる寸前に腕を引きました。なんといふ事でしょう、私の機能美溢れ艶のある鴉の濡れ羽色の美しき外部骨格にヒビが！ 自然治癒には時間がかかるのですよ、なんといふ事をしてくれますか！

私の憤慨を余所に、同類畜生は倒れた私をぶん投げました。一転三転、体に泥がつきまくりました。

「グゲヒヒヒヒヒ…」

勝利の雄叫びなんてあげちゃつてまあ……ああ、これはあれですかね？ ケンがジイチヤンに言われて怒られていたあの言葉の出番ですかね？ え、いいんですかもう黙っちゃいますよ？

ムカつく。

同じ侵略兵器だからと黙つて、あまり調子に乗つてるとどうなるか思い知らせてあげます。侵略兵器として私の方が先輩である分、偉くて強いのです。

ああ、それに……このまま放つておけば、この侵略兵器は私と友好を結んだ全てを破壊するでしょう。それは許せません、心の奥底の何がが叫んでいます。これがケンの黙つ「せいきのこころ」なのでしょうか。

ジイチヤン、毎日私に「にんじん」をありがとう。カアチヤン、いつも気遣つてくれてありがとう。

オヤジ、私に名前をありがとう。

コヨキ、優しい思いをありがとう。

ケン、私に存在する理由をありがとう。

「グググルゲアアアアアアアア！」

私より強い　ああ、認めましょう。あの侵略兵器は私よりスペックが高いようです　モノが正面から向かってきますが、恐れも何もありません。明鏡止水の境地です、こんな私を褒めてほしいです。

お口、展開。目、展開。拳を引いて、相手をよく見て、足を踏み出し、咀嚼器を食い縛り、タイミングを計り　そして、思いを込めて。

拳を、解き放ちます。

「ゲガアアアアアア！」

叫びます、思いを込めて。「せいぎのこころ」を込めて力の限り撃つ拳は、何にも負けないです。

それがヒーロー……それが私、スピルオーバーマン！

ああ……「侵略」、思い出しました侵略！　それは侵す事！　相手を、侵し尽くす事！　ああ、その通りです！　何のショックかは分かりませんが、思い出しました！　それこそが、侵略！

「ゲゲゲゲゲゲゲ！」

私の腕が、外部骨格が崩壊していきます……しかし、それと共に向こうの侵略兵器の外部骨格も削られていきます。彼もそう長くは持たないでしうが、このままでは先にバテるのは私。

だからエレガントな私はこのまま力比べをする訳がありません……さあ、「侵略」してあげましょ！

「グ……ガ！」

疑問を持つ知能すらないようです、この後輩は！

侵略兵器は電波により思考しています。……体中の体組織がそれを制御する事で各部にある脳が連動して働き、様々な処理が可能となつてゐるわけです。

ならばその体組織を乗つ取ればいい！ 崩れた部分から私の体組織を干渉させ、余剰なほど電波を発すれば、彼の機能に障害を「えられる！」

「グゲエエエエエエ！」

「止まれ」と叫びたかったのですが、どうやらこの喉は未だ意味ある発音を成しません。しかしそれで十分、こいつには声を聞かせても理解してくれないでしようから。

そして 数秒後、決着は尽きました。

＊＊＊

後から送つた侵略兵器の信号が途絶えた。先に送つた方は未だ信号は健在だ。

信号が途絶えたという事は、完全に命が絶たれたという事。これはもう間違いない、地球人は我々の兵器を撃退する力を持つてゐるのだ。

ありえないはずだつた、だが現にその結果を目の当たりにしてしまつた。このような辺境惑星の一つがあんな力を持つてゐるなどと。

本国への報告は不可能だ。失敗の言い訳とされて聞き入れられず更迭されるのがオチだらう……私が、短期間でこの惑星を滅ぼさなければいけない。

ふふふ、面白い。地球人よ、この私自らお前達に引導を渡してやうう。

* * *

宇宙空間から謎の悪意を感じましたが気がせいでしょう。究極の侵略兵器たる私にも日常の些細な間違いはあるのです。

「侵略」、ええ分かつてありますよ侵略。他者を蹂躪しつくす事ですよ、ふふん

私、決めました。「せいぎのみかた」をすると同時に「侵略」する方法 同類を滅ぼしつくすという道を行へること。

日記は付けますが、日付は必要ありません。誰かへの報告ではなく、私自身の日記なのですから。日付など内容を読めば思い出せる超記憶力さえあれば問題ないです。

さて今日という日、初めて日記といつ意図を持つて筆をとりましょ。流石私、「筆をとる」を慣用的に使つてこう活用する可能です。

といひ訳で

「ゲー……

にんじん、おいし……。

(後書き)

はい、読んでくださつありがとうござります。面白かったなら嬉しいです。

いつもは毎々と後書きを書きますが、今回に限つては語る事は多くないので一言だけ……。これもまたヒーローだよね！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5862k/>

宇宙から来た黒いヤツ

2010年10月12日13時37分発行